

で可愛がっている相手から、自分の計り知れない何かを感じ取ってドキッとすると、いう経験は、おそろく誰しもが持っていることでしょう。「負うた子に教えられる」とは、手の内にあると信じていた下位の者が、突然畏るべき上位者へと変貌する機微をよくとらえた格言であるといえるのです。

どんな他者でも、自分の力や了解の及ぶ部分を持っており、その限りで、他者はある程度自分の手の内にある、つまり自分と同じ存在です。しかし同時に、どんな他者にも、自分とは異なる及びがたい部分があります。どんな他者でも、いくばくかは自分の「手の外」にある。そのことを受けとめる心のあり方こそが、他者への畏敬としての「敬」にほかなりません。だからこそ、親しき仲にも尊敬、礼儀は欠かせないのです。

世の中をなめてはならない

我々は手の内にある他者に対しては、容易になれ親しみ、思いやることができます。場合によつては、いじめたり、服従させたりすることさえ可能です。しかし、どんな他者でも、絶対自分とは異なる部分、つまり不可測で及びがたい部分を持っております。それこそがまさに、

他者が「他」であるということなのです。

いじめや幼児虐待といった事件が報じられるたびに、世の識者はしきりに「生命への畏敬」ということを叫びます。しかし、いじめる側、虐待する側は、別に生命そのものを軽んじているわけではありません。そういう人たちだって、自分や、自分より上の者の生命は十分すぎるくらい尊重しているのですから、識者の意見はやや的外れのように思われます。問題はむしろ、自分より小さい者、弱い者もまた、自分の決して及ばぬ「他」であるという事実への、信じがたい鈍感さにあるのです。

欠けているのは、生命への畏敬ではなく、「他者への畏敬」すなわち、わからないものへの「うやまい」「つつしみ」なのです。

どんな相手でも自分より上のものを秘めている。そのことを一瞬でも忘れることを、武士たちは「油断」と呼んで徹底的に警戒しました。相手を弱小と侮あなどれば、必ず痛い目を見るところという教訓を、武士たちは実地の経験から学びとっていたからです。また宗教家たちは、一木一草のような些ささい細なものにも、畏怖いふかすべき大なるものを感じ取るうとしてきました。

科学万能の近代社会にあつては、見通しがたく測りがたいものへの畏敬の念は、無知ゆえの迷妄めいもうとして排除されてきました。しかし、自分以外のすべてが自分とは異なる他である以上、

世の中は常に測りがたい不可思議に満ちているのです。世の中をなめてはならないという教訓は、今日一層その重みを増しているといえるでしょう。